

グローバルイゼーションと戦争のディスコース

——海外在住日本人女性の言説における時間—空間の再編成——

小 川 葉 子

序 グローバルな時間—空間の再編成

「グローバル・ナショナル・ローカル」といった用語に端的に示されているように、グローバルイゼーションをめぐる従来の議論においては、さまざまなスケールにおける社会的な空間の再編成が中心となってきた。本来、「グローバルイゼーション」の定義そのものが、「社会における時間—空間の再編成」を意味しているとしても、実際の分析は、地球規模の社会変容を連想させる「空間」的な側面、あるいは、実際の地理的な場所に規定されてきたといっべきよい。

そういった流れの反動ともいうべきか、ここにきて、「時間」研究があらたな動きをみせている。特に、記憶

や歴史を射程にいった「時間—空間分析」が展開しつつある。そこには、二種類の思想的な潮流が重なりあっているように見える。

第一に、現代社会理論の分野における動きである。半分おざなりにされてかけていた「時間」の研究に一石を投じたのが、B・アダム (Adam 1990; 1995) の比較社会学的な研究だとすれば、A・ギデンス (Beck, Giddens and Lash 1994) は「グローバルイゼーションにおける伝統と集合的記憶との関係を論じている。また、D・ハーヴェイ (Harvey 1994) は、「社会的構成 (Social Construction)」という概念を用いながら、時間—空間の再編成における社会的・主観的な側面をますます強調しつつある。これらの一連の諸考察によって、

まさに、「時間」「空間」の両者を統合した「時間—空間」分析 (Friedland and Boden 1994; Lash and Urry 1994; Urry 1995) のあらたな局面が切り開かれつつあるといえよう。

第二の潮流は、実際の社会現象、そして、われわれがよってたつ「現在」の思想的な位置づけをめぐる諸考察と不可分である。特に、第二次世界大戦終戦五〇周年をはじめとするさまざまな記念行事が世界各地で催され、さらにそれが世界各地で異なった視点から報道され、さまざまな記憶の再構築がおこなわれた。ユダヤ人大虐殺 (Friedlander and Seigman 1994) 、湾岸戦争 (Friedland and Boden 1994) 、原子爆弾投下 (米山 1995) など、まさに人類史上、類をみない人工的な大量殺戮の数々を回顧し、再考する機会となったわけである。このように、グローバルなコミュニケーション環境において、人・もの・情報のみならず、「戦争の記憶」——一見、普遍的に見えながら実は乖離した——が越境することによって、異なった主体の認識のギャップが露呈したといえよう。すなわち、特定の事件を、グローバルな時間に位置づける際、異なった主体のもつローカルな知識が、文字

通り衝突するのである。

本稿では、グローバルイゼーション研究におけるキーワードである「時間—空間の再編成」を、言説(ディスクール)の観点から探ろうとするものである。それは、筆者が従来取り組んできた日常生活における行為分析にみる時間—空間の再編成をめぐる一連のエスノグラフィ(民族誌)的研究(小川 1994a; 1994b; 1995)と相補的な意味をもつ。すなわち、グローバルイゼーションというマクロな社会変動のなかで、ローカルな場所で当然視されていた相互知識や常識をもつ主体がどのように対応していくのか考察することである。特に、ここでは、海外在住日本人女性を対象に、「戦争」をめぐるディスクールとそれを語る主体のストラテジーをあきらかにしたい。「いま—ここ」と、それとはかけ離れた「時間—空間」が再編成されていく方略をみることで、最も普遍的なものとも最も特殊なものが同時に交錯するグローバルイゼーションのダイナミックスをみることができるだろう。

1 グローバリゼーションとコミュニケーション研究の接合

今までの議論では、グローバリゼーション概念について、あえて深く言及することなく、全体的な問題意識を述べてきた。この節では、あらためてこの概念について、筆者がもつ理解と基本的なアプローチを概説しておこう。

グローバリゼーションの考察については、現在、さまざまな研究分野からのアプローチがなされつつあるといえよう。すなわち、経済学、地理学、社会学、都市研究、国際政治学、カルチュラル・スタディーズ、コミュニケーション研究などである。より正確にいうならば、グローバリゼーションというひとつの問題関心によって、異なった研究分野の再統合がおこなわれつつあるといえる(小川 1994a; 1995)。

このように、思想的な背景を異にする諸分野で、しかも異なった含意で使われるために、グローバリゼーションという用語には、混乱がつきものである。そこで、本稿では、この概念をどのように把握しているのか、あらためて定義しておこう。

第一に、移動・輸送・情報コミュニケーションなどが活発化することによって、時間—空間の再編成が、グロ

ーバルなレベルでおこりつつあることである。

第二に、一方的に世界が同質化するような動きではなく、グローバルな社会統合とローカルな差異化が、弁証法的に変容しつつあることである。ここでは、以下にあげるような対抗する諸力が拮抗していると考えられる。

普遍化と特殊化 (universalization vs. particularization)

同質化と差異化 (homogenization vs. differentiation)

統合化と断片化 (integration vs. fragmentation)

中心化と脱中心化 (centralization vs. decentralization)

併存化と折衷化 (juxtaposition vs. syncretization)

次に、グローバリゼーション研究をすすめるうえで、具体的にどのような研究戦略が考えられるのか。以前、論証したように(小川 1994a; 1995)、次の三つの視点が重要と考えられよう。

第一に、グローバリゼーションが具体的にどのような現象としてあらわれるのか、特に、ローカルな社会と

の関係において、エスノグラフィー(民族誌)的に記述してゆくことである。

第二に、グローバリゼーションがすすむなかで、ローカルな場所でも当然視されていた相互知識や常識がどのように変化していくのか考察することである。

第三に、グローバリゼーションが社会全体にもたらした予想外の帰結とはなにかをあきらかにすることである。

序論で述べたように、本稿では、このうち、第二の視点について、特に、「戦争」をめぐる知識に注目しつつ考察を行ないたい。

その対象として、筆者がおこなってきた海外在住日本人女性のコミュニケーション・プラクティスの比較研究(小川1994a; 1994b; 1995)をもとに具体的な分析をすすめていこう。近年、グローバリゼーション研究とジェンダー研究を架橋する必要性が叫ばれている(Robertson 1991: 81; Lash and Urry 1994: 311)。C・エンローは、女性移民労働者、セックス・ツアリズムとならんで、外交官の妻たちや、ハリウッドのブラジル人女優をとりあげ、グローバリゼーションのなかで女性たち

が果たした文化的な役割を鮮やかに考察している(Enloe 1994)。このような視点に共鳴しつつ、「グローバリゼーションと文化的コミュニケーション」の問題を論じていきたい。

2 海外在住日本人女性と異なった相互知識への「再埋め込み(reembedding)」

ここでもう一度言及しておきたいのは、さきにあげたグローバリゼーション研究の第二の視点である。ある程度閉鎖的で、共有知識が行き渡った日本という情報地理空間を出て、イギリス・アメリカ・香港などの各地に移動した日本人女性たちが直面するのは、自分たちの慣れ親しんだ常識ではない。空間的移動と新しいメディア/コミュニケーション環境への挿入が生み出すもの、それは、この新しい文脈のなかで自分の知識を再認識する作業である。異なった空間における経験とは、同時に、そこで共有されている歴史的な知識との出会いでもある。相互知識の違いといった場合に、もっとも重要と思われるのが、各国、あるいは、各地における歴史観、特に戦争をめぐる集合的記憶の違いであろう。

例えば、第二次世界大戦に関して、アメリカでは、「パール・ハーバー」いわゆる日本による真珠湾攻撃が取り沙汰されるのに対し、日本で思い出されるのは、「ヒロシマ・ナガサキ」という被爆体験であろう（油井 1995; Dover 1994; Dockrill 1994）。イギリスの場合には、対日戦争体験といえ、ビルマなどの地で日本と交戦した「極東戦線」、そして、香港・シンガポールなどの植民地から脱出をはかった一般市民の抑留も含めた「捕虜経験」と考えられる。だが、日本側にしてみれば、対米にみられるような「原爆」に値するほど、英国に対して、明確な戦争の記憶は思い当たらない。香港の場合は、三年八ヶ月にわたる「日本による占領」があげられる。だが、日本にしてみれば、香港に対する戦争イメージもまた、あいまいなものであろう。

特に、「戦争と女性」について、あまり知られていない事実として、第二次世界大戦に日本軍に捕虜になった何千人にもぼる民間女性たちの強制収容の問題がある。一九七〇年代の終わりから一九八〇年代初期にかけて、イギリスの帝国戦争博物館では、元捕虜となったイギリス女性たちの生存者から聞き取りをおこない口承資料を

作成した。その口述録音テープを分析したM・ブルックス (Brooks 1987) に従って、女性たちが語った経験を要約しておこう。

一九四二年から一九四五年にかけて、日本軍に抑留された女性たちは、イギリス人・オランダ人など、植民地システムのなかで極東に滞在していた者たちであった。そのなかには、軍人・ビジネスマン・政府役人などの夫の都合で駐在していた妻たちと、宣教目的の修道女、看護婦など、自分の職業の関係で滞在する女性たちが含まれる。シンガポールとオランダ領東インド諸島が陥落したのち、極東からの脱出に失敗した男女含めて約2万人のイギリス市民が日本軍の強制収容所に抑留された。ほとんどの場合、子供たちを別にすれば男女は隔離され、女性たちは、日本占領下の東南アジア諸島の各地に作られた約一五ほどの捕虜収容所にふり分けられた。強制収容キャンプは、鉄条網などで外部から隔てられ、監視下に置かれていた。ブルックスがいうように、植民地支配のなかで、「妻」としての役割を担い、夫や召使に囲まれていた白人女性たちは、以前の生活からは程遠い状況に投げ込まれたといえる。女性捕虜には、ほぼ毎回2回

の点呼、おじぎなどの身体的規律、労働などが、日課として課せられた。そのもとで、女性捕虜の1/3、男性捕虜の半分以上は、栄養失調や熱帯病などで死亡していた(Brooks 1987)。

このような歴史的なできごとがイギリスで注目を浴びたのは、メディアにおける表象の影響も大きいといえる。一九八〇年代にBBCによって何回もシリーズ化されたテレビ・ドラマ『TENKO(点呼)』は、その後、何回も再放送され、人気を博した(小川1994b)。脚本家のひとりのことばを借りれば、その内容は、「第二次世界大戦中の三年半のあいだ、日本人に抑留されたイギリス人の女性たちの集団をたどった」ものであり、また、「彼女たちの解放後の姿と強制収容生活をもたらした帰結」を描いたドラマであった(Hyem 1987: 153)。従来の男性中心の戦争映画に対し、女性キャストを中心にすえ、さまざまな年齢の女性キャラクターを登場させた点で、このドラマは、戦争表象とジェンダー研究の視点からも評価されている(Bazalgette 1984)。

この『TENKO』は、「二重の意味で興味深い。第一に、C・エンローが指摘するようなグローバライ

ゼーションのなかで女性が担った(あるいは、担わされた)文化的な役割についての示唆を具体的にイメージさせる素材であるといえる。

第二に、メディア表象の描きだす時間—空間と日常的な会話の時間—空間の対比、さらに、西欧人と日本人が「極東」に入り込んでいった過去の植民地状況と、自分たち日本人がヨーロッパ・アメリカ・香港に在住するという現在の状況を対照させるなかで、時間—空間の再編成の問題を重層的な視点から考察できるのではないかといえる。

4 『TENKO』とフィールド調査について

筆者は、一九八八年から、海外在住日本人女性のアイデンティティを考察するうえで、このドラマの視聴を中心とする比較研究をおこなってきた(小川1994a, 1994b)。それに先立ち、この番組制作者(二人の女性脚本家と一人の捕虜経験をもつ番組アドバイザー)のインタビューにもとづき、ある仮説を作成した。すなわち、それは、『TENKO』をみた日本人女性たちは、アイデンティフィケーションの対象として、次の二つのうち、

どちらかを選ぶのではないか、というものである。すなわち、ジェンダーを同じくするイギリス人女性捕虜たちか、エスニシティを同じくする日本軍男性かという選択である。

しかし、実際に調査してみると、日本人女性たちは、どちらにも自己同一化しているようでもあり、どちらにもアイデンティファイしていないようでもあった。なぜなら、彼女たちの語る言説のなかでは、エスニシティとジェンダーという二つの（潜在的な）アイデンティティの宿り場が脱構築されてしまっているようにみえたからである。

イエスとノーがはっきりする二者択一の調査でなく、著者と一対一のインタヴュー、または、著者を交えた数人のディスカッションが、一定時間続くなかでは、次のような論点が繰り返し登場し、ときには、矛盾するような発言が積み重なってゆくのである。

- ・「昔の日本人と今の日本人は違う」
- ・「日本人男性と日本人女性とは違う」
- ・「イギリス人女性の立場に身を置いて観ていまし

た」

- ・「極限状況に置かれたら、誰でも自分の身を守るためになんでもする」

・「人間は、みな同じ」

このように、語りの時間的な変容のなかで、「日本人」というエスニシティ」が前提とする歴史的な連続性や「ジェンダー」を越えた共通性が否定される。他方で、「人間という種」や「女性というジェンダー」によって、「イギリス人女性」との結びつきが強調される。さらに、「極限状況」と述べたあとで、非常に身近な日常の経験に飛び移ってしまう。すなわち、言説ストラテジーのなかでは、歴史的・領域的な連続性が否定され、再構築されるうちに、普遍的な時間—空間と特殊な時間—空間が再編成されるのである。

そこで、本稿では、「グローバリゼーションと海外在住日本女性のアイデンティティ」という大きな問題を考えるための基礎的な作業として、「言説のなかの時間—空間の再編成」という視点に注目したい。つまり、そもそも、「離れた時間—空間」を語ることと「いま—こ

こ」との接続とはどのようなようになされているか、という問題提起である。五〇年近く前の東南アジアで繰り広げられる事件の時間—空間、五〇分間のテレビ・ドラマの時間—空間、そのテレビ受像機の置かれた部屋で会話を繰り広げる発話者の時間—空間、そのような要素の布置状況を、実際に語られた言説をてがかりにみていこう。

5 言説における「時間—空間の再編成」の

ストラテジー

—「極限状況」という時間—空間の「脱埋め込み (disembedding)」—

ここでは、海外在住日本人女性の言説のなかでみられた「時間—空間の再編成」というストラテジーのうち、最も一般的とおもえる二つの方略の記述と考察をおこなうことにしよう。

第一に、滞在地、年齢にかかわらず驚くべき頻度で使われたのは、メディア言説から自分たちが読み取った状況を「極限状態」ということばで一括りにし、それを、メディアをみて話をしている主体自身がおかれた状況からは、引き離して表現するというストラテジーであった。

このドラマの全体的な印象についての言説では、物語のテーマは、「極限状況におかれた女性たちの生きざま」という表現が最も多かった(小川 1994b)。それ以外のトピックス(ドラマの中で印象に残った場面、目立った人物、感情移入できる人物など)についての会話においても、圧倒的に、「極限状況」、「極限状態」という用語が使われている。または、それに類する表現として、「限界状態」、「非常事態」、「ああいう状況」という用語が補足的に使用される。同じ言葉でも、文脈により異なった含意をもつことは、往々にしてあるが、この場合、それぞれの用語がおかれたコンテキストを比較してみても、意味的に共通性が高いといえる。

ここでは、四人でおこなったディスカッション(著者も含めると五人)に参加した二人の女性(調査当時ロンドン在住)の言説を引用したい。場所は、参加者の方のうち一人の自宅の居間で、時間は、ビデオ視聴直後からお茶を飲むために中断するまで、話は続けられた(テープC)。その録音を発話者別に、書き起こしたトランスクリプトは、約三四ページ(約一二六〇行)にわたった。Aさん、Dさんの発言は、いずれも、ディスカッション

の初期(三四ページ中、それぞれ一ページめ、四―五ページめにあたる)におけるものである。Aさんの言葉は、筆者が全体的な番組の印象を尋ねた質問に対する答えである。約一五秒の沈黙のあと、参加者四人のうち、だれが一番先に感想を言うのかをお互いに決めるやりとりのあとの第一声である。三人のそれぞれが順繰りに簡単な印象を語ったあと、意見を述べたのが、Dさんの発言である。^(注)

Aさん「あの、まず最初は、そうですね、一番大きくは、一〇回シリーズの一回だけ(一〇回連続ドラマの第九話：著者注)ということで部分的なのでございますけれど、あの、今までに、たとえば日本の戦争中のたとえば、キャンプ(捕虜収容所：著者注)の様子を知ろうとか、それから、その当時の日本の軍部の考え方を知らうとか、そういうことはあまり関係がないような番組で、そうではなくて、ある極限状態で、イギリス人が、どういうふうに一人一人が、その一人一人の性格を基盤にして、どう対処していくか。たとえば、困ったときにはどうするか、それからあのパニッシュメント(刑罰：著者

注)を受けている人に対してどうするかとか、そういうことっていうのはあまり戦争、あの第二次世界大戦の、しかもアジアのどこかの島でって、日本のキャンプでって、そういうことは……ただたまたま場面設定がそうだったんであって、一つの人間ドラマ、たまたまそこに設定を置いたという、そういう番組なんだなあと思いましたけど。それがまず第一印象。(ロンドン集団ディスカッションテープCトランスクリプトp.13-26行)」

Dさん「(途中略)でも観てみましたら、わりとヒューマニティーというか、人間性に非常に焦点を与えたドラマであって、あの、さっき極限状態という言葉が出ましたけど、つまり特殊なシチュエーションに人間が置かれたら、それが日本人であれ、イギリス人であれ、オランダ人であれ、何人であれ、たぶん人間一人一人がこういう行動をするんじゃないか、Aさんはこういう行動をし、Bさんはこういう行動をし、Cさんはこういう行動をし、Dさんはこういう行動をすると、そういうところに焦点を当てているという。これ(この番組：著者注)に関してはです、他をちょっと知りませんが、これに

関してはそういうヒューマニティー、人間性に、人間の心理とか、人間のいろんな、あの、心のヒダとか、陰とか、そういうものにあの、焦点を当てているドラマだと思いました。だから、そういう意味では端的に言えばです、ね、ロビンソン・クルーソーであり、他にその、たとえば離れ島にです、ね、あのボンと置いて行かれたあの人間の話というのは、もう本当に古今東西、あの、昔から

いろんなストーリーもあり、小説もあり、極限状態で人間の心理というもの普通の、正常よりは変わっていくとか、ある部分だけが強調されるとか、それから、あの、いろんな極限状態に押し詰め(追いつめ：著者注)られたときに変わっていくもんですけれども、そういう普遍的な何かを追求しているドラマであって、必ずしも残酷性とか、あの、人間、または、一言で言えば日本人の冷たさとか、そういうことよりも全体的に人間ということに目を当てているから、それはそれなりに私は大変共感を持って観ました。(後半略)(ロンドン集団ディスカッションテープDトランスクリプトpp.4-5, 135-170頁)」

多くの事例のうち、この二つを特定した理由は、かな

り長い意見を述べており、単語レベルでなく、文脈レベルで意味を推定することが可能なケースであるためである。

これらの事例により、筆者が強調したい論点とは、「極限状況(ここでの実際の表現は、極限状態)」が、かなり理念化された時間-空間を示していることである。特定の場所性や具体的な細部を否定したAさんの発言、「ロビンソン・クルーソー」をひきあいにだすCさんの発言からもみてとれるように、ここでは、「人間」全体にとっての普遍的状況、人間個々人のもつ本質的なものが露出する状態が想定されていると考えられる。このような発言は、同じドラマ・シリーズのなかから視聴素材として選んだ二つのエピソード(第一シリーズの第三話と第九話)のどちらについても、一般的にみられるものである。

しかし、ここで想定されている「極限状況」とは、そもそもなにか。以下にあげる二人社会学者たちは、それを最も突き詰めた形である、「強制収容所」の意味について考察をおこなっている。女性たちの言説を考える手がかりを得るために、二つの概念把握をみてゆこう。

第一の把握は、近代におけるユダヤ人大虐殺の意味を検討したZ・パウマンによるものである。彼は、ホロコーストについての彼自身のイメージがどのように変わったかを次のように述べている。はじめは、きちんと額縁に入れられ壁にかけられた絵であり、それだけが飾り付けられた部屋のなかで異質な雰囲気をもつようにみえた。しかし、実はそれは外の世界をのぞく窓であった。それがないければ、家の外の世界に広がる悲惨な光景を目にすることはできないような。目をそむけなくなるような光景だが、それだけに見据えなければならぬのだと彼は述べている (Bauman 1989: pp vii-viii)。

第二に、A・ギデンスの把握 (Giddens 1984: 61) をみておこう。B・ベッテルハイムの強制収容所の考察を引用しながら、彼は、「極限状況 (critical situations)」を次のように定義している。すなわち、「多くの個人に影響を与えるような、予測もつかないような種類の、根源的な分断の諸状況 (circumstances of radical disjuncture)、制度化されたルーティーンのもつ確かさを脅かしたり、破壊したりする諸状態」(Giddens 1984: 61) であると。さらに述べているように、「強制

収容所の経験とは、単なる抑留ではなく、日常生活という慣れ親しんだ形態が極端に分断される点が特徴的である。その分断は、次のような要素が原因となっている。すなわち、容赦ない生存状況、収容所の監視員から与えられる絶え間ない脅威や実際の暴力行為、食料やその他の生命維持のための基本的な要素の供給が欠乏することなどである」(Giddens 1984: 61)。

先ほどから女性たちのいつていた「極限状況」とは、そもそもどのような時間—空間なのか。この問題を考える補足的なイメージを社会学者の二つの考察における共通項が与えてくれるだろう。それは、ひとことではいえず、「剥奪 (deprivation) の時間—空間」である。すなわち、自由の剥脱、権利の剥脱、生きるための欲求の剥脱、身体感覚の剥脱、人間性の剥脱、なによりも日常生活のルーティーンの剥脱が特徴となる。『TENKO』という番組に関するさまざまな資料のなかでも、「剥奪」という概念が、ドラマのなかで描かれた状況についての共通認識となっている。要するに、女性たちの言説ストラテジーにみられた「極限状況」とは、「戦争」と「強制収容所」という二つの概念を包含し、社会学や社会思

想の対象ともなるような、きわめて普遍的な時間—空間であるといえよう。

6 言説における「時間—空間の再編成」の

ストラテジー2

—「極限状況」の「再埋め込み (reembedded-ing)」と主体による「時間—空間」移動—

第二に特徴的なのは、ひとまず「脱埋め込み」された「極限状況という時間—空間」が、「メディア／対面コミュニケーション」の時間—空間(いま—ここ)、「日常生活の時間—空間」などと結びつけられてゆく方略である。それは、「自分の経験する時間—空間」「メディアの時間—空間」や「身近な戦争経験者から聞いたストーリーの時間—空間」というほかの時間—空間を経由することによってなされてゆく。

ここでもまた、同じくロンドンで、さきほどの例(テープC)の数ヶ月後に、異なるメンバー(著者を含めて五人)によっておこなった集団ディスカッション(テープD、トランスクリプト約二四ページ、約八八〇行)を参照してみよう。

おおざっぱにいうと、そこに至る議論の流れは、次のようなものであった。

・「内容や事実関係についての質疑応答」→「全体的な印象」

この「全体的な印象」のところから、「戦争の時間—空間」と「日常の時間—空間」について、「昔の日本における捕虜観」「ヨーロッパにおける捕虜観」「ドイツと日本の対比」「日本の外国人コンプレックスと優越感」「現在のフィリピン人移民労働者に対する日本の態度」などの論点がだされる。その後、「子供が通うイギリスの学校」「人種の多様性」とあわせて、「で、なんか話が飛躍しちゃってあれなんだけど(p.4, 132-133行)」というフレーズのあとで、「日本の学校におけるいじめ」「日本の新聞におけるいじめの話題」「イギリスの学校のおおらかさ」「オランダの幼稚園のおおらかさ」「海外学校における日本人同志でのいじめ」「いじめと個人尊重」といった「日常の時間—空間」が語られる。それから、「だけど戦争のときなんかもみてみると(p.6, 192行)」のフレーズを機に、「読者が自分の戦争経験を語る『テーマ戦争』という朝日新聞の連載投稿記事のなかの話

題」によって、「戦争の時間—空間」にまた戻ってくる。

さらに、『テーマ戦争』をみた朝日新聞が日本で読んだものか、イギリスに送られてくる衛星版かについてのやりとり」のあとで、Aさんが「日本で勤めていた時代に地元の上司から聞いた戦争時のエピソード」の話を導入し、「空や海からの侵略を阻止するための地元民の工夫」について、「鎖国による影響」「情報不足による無理解」「日本の西洋人コンプレックスと単一民族説」などの解釈がなされる。

これをふまえ、別ページにあげたトランスクリプトのなかでの話題の変化をみると、次のようになるだろう。かっこの内数字は、トランスクリプトの行数に対応している。

- ①戦争時イギリス地元民の敵兵への対応—近所のイギリス人から聞いた話 (264-271行)
- ②戦争という状態が常識を起えた相互防衛であることについてのやりとり (272-277行)
- ③会話にでてきたイギリス人が近くに住んでいることについてのやりとり (278-279行)

④戦争経験者から当時の話をきいたかどうかについてのやりとり (280-283行)

⑤その年に亡くなった戦争経験者の父親から戦争の話を聞けなかった話 (284-289行)

⑥子供をもち、平和について考える今の自分が戦争の話を聞きたくなったときに、父親が亡くなった話 (290-295行)

⑦戦争経験者の話を聞かされたほかの人たちの体験についてのやりとり (296-307行)

⑧イギリスBBCで放映された昭和天皇のドキュメンタリーをみて、ショックを受け、他の人の印象を知りたくなったことについてのやりとり (308-321行)

⑨戦争経験といっても、戦争の場所や兵位によって内容は違うという推測 (322-325行)

⑩自分たちの子孫や子供の時代には、二度と戦争をしてほしくないというやりとり (325-330行)

⑪今、イギリス人の認識としては、戦争を「忘れてはならん」というものであり、子供たちにもそうであるという話 (330-332行)

⑫戦争には殺しあいはずきものだが、殺される側にも家

著 者

283 葉のほうに降りてきたの。

A

何か樹皮かどこかにね、だからいっぱい
降りてきたから皆葉すんですって。でも
それはこのイギリシに今でも、ピーター
も言うわね。ここにどイツ兵がいっぱい
降りてきたんだって。そんなときに、皆サ
イツやね、フオーグを持ってね、王様め
始め寄ったというか、それはまんざら日
本人だけではないよね、だけど。

B

正当防衛、やられるには、自分の身を中
らなくちゃならないというのだね。もう
何というか、常識を越えちゃったあんな
んだと思うんですね。

戦争という状態自体が、

C

そうね。

親とか、おじいちゃんとか、おばあちゃんとか、そういう方から戦争の話聞き
ますか、と言うか。。

うちの父は今年ちょっと亡くなった
んだですって、だけど他国間かされな
ったんですね。彼なみには彼が貫通し
た跡とか、いろいろあるし、すごいやっ
ぱ青春の時代を過ごして辛かったことが
すごくあったのか、全く言わない人で、
私も子供のときは聞けずに、今度今は自
分が子供を持つたり、あるいは平和につ
いてとからうと考えるようになって、
本当は真実を知らなくてはならないんじ
やないかと思って、聞きたいなと思った
ときには亡くなったんですね。

だから、いや、他の家では。
やっぱりすごく悲惨な戦地に行かれた
方というのは一切話したからないとか、
あるいはもう何と言うか戦争、17、8
でもう仲間ですごく楽しい、戦争は辛か

D

278? という方は?

279 この近くにいるの。

282 よく聞きました。

284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300

・言説における時間-空間の再編成

・いま-ここ

・日本の各メディアの時間-空間

・自分の体験のストーリーの時間-空間

(日本の映画

・所在地の各メディアの時間-空間

テレビドラマ

ドキュメンタリー

ニュース

新聞)

・所在地の知人・身内から聞いたストーリーの時間-空間

・所在地の戦争体験者から聞いたストーリーの時間-空間

・戦争体験者(自分の身内)から聞いたストーリーの時間-空間

・ほかの戦争についてのストーリーの時間-空間

・戦争の時間-空間

・極限状況の時間-空間

・日常生活の時間-空間

族があるという話(333-336行)

⑬戦争がけっしてなくならず、地球上のどこかで絶えずあることについてのやりとり(336-341行)

⑭戦争になると、男性の果たす役割が大きくなることについてのやりとり(342-350行)

⑮『TENKO』の内容と解釈、ドラマの手法についてのやりとり(351-371行)

⑯『TENKO』にでてくるような日本軍兵士が実際にいたかどうかのやりとり(371行-)

以上のように、言説のなかでは、「過去」「現在」「未来」、または、「真理」「真実」「事実」「現実」「経験」についての知識が、ある程度普遍的な法則的状況から個人の印象に至るさまざまなレベルで、重層的に参照されている。だが、そこにおいては、少なくとも表にまとめられたような異なる時間-空間が想定されていると考えられる。このように、発話者の海外在住日本人女性たちは、自分たち自身が「空間」を移動するように、異なった「時間」のあいだをもめぐってゆく。そのなかで、「極限状況」の「脱埋め込み」と「再埋め込み」が、「いま-こ

こ」や「日常生活」も含めたさまざまな「時間—空間」をまじえてなされてゆくのだといえよう。言説を分析対象としてアイデンティティの問題を考察する際に、一時間なり、二時間なり、語りが繰り上げられるあいだに、発話者がよってたつ「時間—空間」自体が変化していることをもう一度強調しておきたい。

結びにかえて グローバルな社会変容と

主体のストラテジー

本稿では、グローバリゼーションにおけるローカルな相互知識の変容の問題を、戦争のディスコースという視点から、海外在住日本人女性の言説を手がかりに考察してきた。うえに述べたように、ここでは、言説における「時間—空間の再編成」が二種類のストラテジーによってなされていた。すなわち、第一に、『TENKO』という戦争ドラマに描かれた内容を、「極限状況」という時間—空間」として「脱埋め込み (disembedding)」する方略である。第二に、主体がさまざまな言説の「時間—空間」を移動していくことによって、「極限状況」を「再埋め込み (reembedding)」する方略である。

最後に、このような現象は、グローバリゼーション研究の観点からすると、どのように考察できるのだろうか。

第一に、グローバリゼーションとは、そもそも構造的に（行為と知識の両面で）時間—空間の再編成を引き起こしているといえよう。その契機となるのは、ひと・もの・情報の空間的移动だけでなく、世界時間の導入そのものである。すなわち、ローカルな時間の流れではなく、西暦（グレゴリオ暦）とグリニッジ標準時に従って、さまざまな記念 (commemoration) 儀式が、世界各地で、同時におこなわれるために、ローカルな時間—空間に埋め込まれていた相互知識が必然的にぶつかりあうのである。

第二に、グローバルなレベルで、時間—空間の再編成がおこなわれるからこそ、それに対抗する方略として、ローカルな知識をもつ主体が、その言説において、時間—空間の再編成をおこなうのではないか。さらに、そういった言説自体が、リフレクシヴにグローバルな社会変動を左右してゆくきっかけとなるとも考えられる。

そういった意味で、本稿でみてきた事例は、グローバ

ルとローカルとの弁証法を鮮やかに提示しており、今後さらに考察をすすめる必要があるといえよう。

(注) 参加者の女性四人(著者も含めると五人)は、いずれも夫が同じ会社に勤務している関係である。そのうちのひとりが声をかけて、集団デュスケーションの機会を設けてくれた。フライバシーの保護のため、配偶者の会社における役職は特定しなかった。また、夫の役職の上下が、発話者たち自身の発言にどのような影響を及ぼしているか、という権力関係の分析めっころではおこなっていない。

- Addis, E., Russo, V. E. and Sebesta, L. eds. (1994) *Women Soldiers*, London: Macmillan.
- Baehr, H. and Dyer, G. eds. (1987) *Boxed In*, London: Pandora.
- Bazalgette, C. (1984) 'TV Drama Goes Back to Front', in Hurd, G. ed.
- Beck, U., Giddens, A. and Lash, S. (1994) *Reflexive Modernization*, Cambridge: Polity.
- Brooks, M. (1987) 'Passive in War?', pp. 166-178, in MacDonald, S., Holden, P. and Ardner, S. eds.
- Bauman, Z. (1989) *Modernity and the Holocaust*, Cambridge: Polity.
- Dockrill, S. ed. (1994) *From Pearl Harbor to Hiroshima*,

- London: Macmillan.
- Dower, J. (1993) *Japan in War and Peace*, New York: The Free Press.
- Enloe, C. (1990) *Bananas, Beaches and Bases*, Berkeley: Univ. of California Press.
- Enloe, C. (1994) 'The Politics of Constructing the American Woman Soldiers', pp. 81-110 in Addis, E., Russo, V. E. and Sebesta, L. eds.
- Friedland, R. and Boden, D. eds. (1994) *NowHere. Berkeley*: Univ. of California Press.
- Friedlander, S. and Seligman, A. B. (1994) 'The Israeli Memory of the Shoah', pp. 356-371 in Friedland, R. and Boden, D. eds.
- Garnham, N. (1990) *Capitalism and Communication*, London: Sage.
- Giddens, A. (1990) *Social Theory and Modern Sociology*, Cambridge: Polity.
- Giddens, A. (1991) *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity.
- Hardwick, M. (1984) *Last Tenko*, London: BBC.
- Harvey, D. (1990) 'Between Space and Time', *Annals of Association of American Geographers*, 80-3: 418-434.
- Harvey, D. (1994) 'Historical and Geographical Perspectives on the Social Construction of Space and Time', 日本地理学会1994年度秋季学術大会講演。

Hurd, G. ed. (1984) *National Fictions*, London: British Film Institute.

Hyem, J. (1987) 'Entering the Arena', pp. 151-163 in Baehr, H. and Dyer, G. eds.

King, A. D. (1991) *Culture, Globalization and the World-System*, London: Macmillan.

Lash, S. and Urry, J. (1994) *Economy of Signs and Space*, London: Sage.

Livingston, S. and Lunt, P. (1994) *Talk on Television*, London: Routledge.

Lowenthal, D. (1988) *The Past is a Foreign Country*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Macdonald, S., Holden, P. and Ardner, S. eds. (1987) *Images of Women in War and Peace*, London: Macmillan.

Masters, A. (1981) *Tenko*, London: BBC.

Middleton, D. and Edwards, D. eds. (1990) *Collective Remembering*, London: Sage.

Nishizaka, A. (1993) 'Religious Belief as a Communication Practice', pp. 13-22, *International Journal of Japanese Sociology*, no. 2.

小川葉子 (1994a) 「日常生活としてのグローバル・コミュニケーション」『マス・コミュニケーション研究』四四号。

小川葉子 (1994b) 「グローバルなコミュニケーション環境における英米在住日本人主婦の日常生活と日常的知識」

『明治学院大学社会学部附属研究所研究年報』二四号。

小川葉子 (1995) 「グローバル・イデオロギンをめぐる四つのテーマ」『社会学評論』四四号。

Robertson, R. (1991) 'Social Theory, Cultural Relativity and the Problem of Globality', pp. 69-90 in A. D. King ed.

Todorov, T. (1991) *Face & I'extreme*, Paris: Edition de Seuil, 『極限に面して』宇京頼三訳 法政大学出版会 一九九二年。

Urry, J. (1995) *Consuming Places*, London: Routledge.

Valery, A. (1986) *Tenko Reunion*, London: Severn House.

Warner, L. and Sandilands, J. (1987) *Women beyond the Wire*, London: Arrow.

Waters, M. (1995) *Globalization*, London: Routledge.

米山リサ (1995) 「越境する戦争の記憶」『世界』十月号 岩波書店。

油井大三郎 (1995) 『日米戦争観の相剋』岩波書店。

* 本稿の発想「および」比較調査の段階で、J・ダワー教授(当時、カリフォルニア大学サンディエゴ校、現マサチューセッツ工科大学)から、貴重なアドヴァイスをいただいた。記して感謝したい。

(日本学術振興会特別研究員)